

わたしは食べたおにぎり

竹島小学校 四年 渡邊 紗衣

ぼくはお米の種。茶色いふかふかのベツト
でねるんだ。ぐすり眠っていたら、何だか
まぶしくなつて目をあけた。あれ、ぼくすご
く大きくなつているし、体は緑色だ。いつの
間にか、ぼく、柏に変身したみたい。お日さ
まの光を浴びていると、何だかのどがかわい
てきたぞ。そこに男の入がや、てきて、シャ
ワーで水をかけてくれた。気持ちいい！ぼく

は水をたくさんあびて、どんどん大きくな
ていった。ある日、男の入はぼくをどこかに
運び出した。一体どこに行くんだらう。ドキ
ドキしていると、ぼくは大きな機械に乗せら
れた。機械はぐんぐん田んぼに入、て行くよ。
体が持ち上げられたと思、たら、足がベチヨ
っとした。あわてて下を向くと、ぼくは田ん
ぼの中に立っていた。周りをみると、仲間た
ちもたくさんいたよ。田んぼの中で、ぼくた
ちは毎日楽しくすごした。お日さまの光をあ

びたり、雨のシャワーで遊んだり、風とおど
たりしているうちに、ぼくたちはどんどん
せが伸びていった。暑い夏が終わるころ、ば
くたちの体は黄金色に変わって、頭が重くな
ってきた。いつものように遊んでいると、突
然大きな機械が田んぼに入ってきた。危ない
体をつかまれたと思ったら、足が田んぼから
ぬけてすごい力で運ばれた。暗いところをく
ぐぐたら、すべり台をすべって外に出た。ぼ
くは、ついにお米になったんだ。

しばらくすると、女の人が出てきて、ぼ
くを大きなお風呂に入れた。すいはん器、て
いうんだって。ぼくはそこで、他のお米たち
や井戸水さんと出会ったんだ。ぼくは一体何
になるんだろう。炊き込めご飯かな、おかゆ
かな、わくわくしながら考えた。すると、す
いはん器のふたが開いて、女の人の手の上に
乗せられた。ぼくは、女の人の手でぎゅっ
にぎられた。ちょっとくすぐったくて、もっ
と優しくと思った。そうしてぼくは、塩おに

ぎりになつたんだ。お皿の上に乗ったとき、
食べる人が喜んでくれるといいなと思った。
テーブルに運ばれたら、ぼくの目の前に女
の子が座つていた。女の子は、

「いただきます。」

と言つて、ぼくたちをつかんだ。ぼくはドキ
ドキした。そして、大きな口ではくり。あ、
という間にぼくたちを飲み込んだ。すると、
上の方から、

「おいしい！」

という声が聞こえてきた。ぼくはともうれ
しくなった。ぼくのねがいがかかったんだか
らね！一緒にいるみんなもうれしそうでも、
ぼくたちの役目はまだおわりじゃないよ。ぼ
くたちのパワーで女の子の体を元気にするん
だ。

おにぎりを食べ終わつた女の子は、大好き
なダンスの練習に出かけていった。女の子は
ぼくたちのパワーで元気におどつた。楽しく
おどれてよかったね。